



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより12月号2012

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



今月の予定

聖歌練習 半田 12月5日(水)12時ごろから

半田も降誕祭を4部合唱で歌ってみましょう。

名古屋 聖体礼儀後毎回。降誕祭の練習。

名古屋指揮当番

2日ピーメン松島 9日エレナ広石 18日マリア松島 24日全員

6. ヘブライの伝統、旧約から新約へ その1

— 新たなるエルサレムよ —

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためではなく、完成するためである。(マタイ5:17)

「ビザンティンの礼拝はユダヤ教の伝統の上に古典ギリシアの芸術的技巧的成果を吸収しながら徐々に発展していった」と書いたところ、プロテスタントの方からキリスト教がヘレニズム化したときにユダヤ教の伝統は失われたのではないかという指摘を頂いたことがあります。しかし正教会の見解では、古代教会では、材料としてはギリシア古典文化や現地の言語などを利用しましたが、礼拝的な枠組みの基本はユダヤ教から多くを受け継いでいます。

礼拝の最も古い層はユダヤ教、旧約聖書に由来する部分です。パウロもペテロもイエスご自身も、出自は敬虔なユダヤ教徒で、定期的に神殿に参り、会堂(シナゴグ)の礼拝に参加し、ユダヤ教の習慣に従って毎日2回あるいは3回祈り、安息日(サバト)の食事を行っていました。主の復活昇天後も、使徒たちはエルサレムの神殿に参り、宣教に当たっては各地のユダヤ教の会堂(シナゴグ)に出向き、ユダヤ教のきまりに従って決まった時間に祈っていた様子が使徒言行録や書簡に見られます。

当時のユダヤ教、初期キリスト教の礼拝ともに資料がきわめて少なく、後のキリスト教の時課への関連性ははっきり証明されていませんが、使徒たちは既存のユダヤ教の礼拝習慣を踏襲し、その上にキリスト教の礼拝を育ててゆきました。

会堂での聖書の読みは聖体礼儀前半の「ことばの礼儀」へ、サバトの食事は聖体機密へ、決まった時間に祈る習慣は後の時課祈祷に継承されてゆ

きました。キリスト教の礼拝は使徒たちがゼロから「発明」したのではなく、ユダヤ教の礼拝習慣にキリスト教としての新しい意味が与えられ、必要に応じて修正されて、長い時間をかけてできあがってゆきました。

ところで使徒たちにとって「聖書」といえば旧約聖書で、自家薬籠中の書として使徒言行録や手紙の中でも自由自在に引用しています。ユダヤ教の教典である旧約聖書はキリスト教にとっても神の啓示の書物であり続けましたが、キリストの福音の光の中で新しい意味を持つ書物となりました。なぜならユダヤ教世界はいまだ救世主の到来を待ち続けていましたが、使徒たちは救世主がすでに到来したこと、十字架と復活によって救いのわざを完成したこと、いまでも完成しつつあることをその目で見て知っていたからです。キリスト教徒にとって旧約聖書はキリストによって成就した救いを預言する書物になりました。

旧約聖書をキリストによる神の救いの成就の預言として見る視点は礼拝の式順、暦に従って聖書を読む箇所(レクシオン)の指定、聖歌、聖堂内のイコンや壁画の配置など、すべてに貫かれています。礼拝中に旧約聖書が読まれる場合は、その日の新約のテーマの預言となる箇所が意図的に選ばれており、たとえば降誕祭にはイザヤ、エレミアなどの救世主の到来を預言する箇所が指定されています。

聖堂内のイコンやフレスコ、歌われる聖歌も旧約聖書のできごととはバラバラの物語としてではなく、教会の伝統的解釈に従ってキリストによって完成する救いに至ることがわかるように配置されています。

奉神礼で用いるとき、祈祷書に書かれた祈祷文の多くは、聖歌という形をとります。ことばと音楽をぴったりと完全に融合するためには、三つのわざが一体になって、巧みに用いられなければなりません。三つのわざとは「音楽のわざ」「ことばのわざ」「奉神礼のわざ」です。奉神礼として音楽を調合するわざです。三つのわざは、見る（聴く）目、才能、経験が微妙にかかわっています。「わざ」と名の付くものは何でもそうですが、聖歌のわざも体で習得するものです。

まず「音楽」です。音楽的な技術や音楽理論の裏付けなしに、その音楽が何であるかを理解し、奉神礼の音楽に翻訳することはできません。シンプルに作曲（編曲）できないのは技量が不十分だからです。また、いかにシンプルな音楽でも技術不足、練習不足の聖歌隊が歌えば、騒々しいだけです。

第2に、教会の音楽は「ことば」の芸術であることを理解しなければなりません。スラブ語の聖歌に比べて、英語の聖歌は音楽的でないという人たちがいますが、それは聖歌の役割を理解していないからです。歌われている内容をあとから神学的に「説明」したので

は不十分なのです。聖歌そのものが、説明であり、啓発であり、招きです。すべての人が礼拝に参加しながら福音を理解するために聖歌があるのです。

言語はそれ自体が芸術です。「ことば」は音楽と結ばれる時、この上なく完全になります。「ことば」の芸術の詩的な力と美しさを「声」を用いて表すときに、音楽的なわざが基本になります。また「ことば」そのものにも、動きやポーズ（休止）という音楽があります。「ことば」はいのちそのものように鼓動し、あふれ出るニュアンスと抑揚、リズムとポーズを通して、複雑な関係をつむぎ、奉神礼として祈るために与えられた「いのち」を描き出し、あかします。

「ことば」を表現する「わざ」の欠如も問題です。教会音楽家は「ことば」を芸術として尊重する詩人でなければなりません。翻訳文が少々まずくても音楽を理解する詩人の手にかかれば、深い意味を歌い出すことができるはずですが、しかし現実には神が息をふきこんだ聖詠や讃歌や歌頌が、下手な歌のためにすっかり息を抜かれていることがあります。

参考資料 聖歌の工夫を学ぼう、スラブ語から英語の場合 「主、憐れめよ」

1

Обыч. напѣва.

Го-спо-ди, по-ми-луй. Го-спо-ди, по-ми-луй.

Го-спо-ди, по-ми-луй. Го-спо-ди, по-ми-луй.

Го-спо-ди, по-ми-луй. Го-спо-ди, по-ми-луй.

2

Lord, have mer - cy. Lord, have mer - cy.

Lord, have mer - cy. Lord, have mer - cy.

3

Lord, have mer - cy. Lord, have mer - cy.

Lord, have mer - cy. Lord, have mer - cy.

ロシア移民の教会では、スラブ語のメロディをもとにして英語の聖歌を作り始めました。1はスラブ語の「主、憐れめよ、ゴスポヂ・ポミーリイ」です。スラブ語のリズムは「ゴス・ポ・ヂ・ポ・ミー・リイ」までは一拍で、「ミー」が長く伸び、「リイ」が添えられます。最後の音は「終わり」を示すために長く伸びています。

さて、スラブ語と英語では言語自体のリズムが異なります。比較してみましょう。弱拍を●、強拍を○で図解すると
<ゴス・ポ・ヂ・ポ・ミー・リイ>です。

● ● ● ● ○ ●
ところが英語の自然な発音では「ロード(主)」に長い教勢が置かれ、「ハヴ」は短く「マー」が伸びて、「シイ」が添えられます。
<ロード・ハヴ・マーシイ>です。

○ ● ○ ●
2はスラブ語をそのまま英語に置き換えただけで英語のリズムが表現されていません。ロードを長く歌うと、幾分英語らしくなります。3はキエフ調メロディを英語にしたものですが、「ロード・ハヴ・マーシイ」という英語のリズムが活かされたリズムになっています。

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究